

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	アラーム付き薬入れを活用した独居認知症高齢者への服薬支援
演者名	井手 美子、片山 智栄、新川 祐利、遠矢 純一郎
所属	医療法人プラタナス 桜新町アーバンクリニック

目的：認知症のために、自己管理下では薬の飲み忘れや過剰服薬が生じた、独居認知症高齢者の服薬支援のため、国立障害者リハビリテーションセンターの協力を得て、服薬支援機器「アラーム付き薬入れ」を取り入れる事で、服薬コンプライアンスの向上を目指す。

実践内容

<対象者>87 才 女性 アルツハイマー型認知症 CDR1 要介護 1

<介護サービス利用状況>

訪問介護→毎日 1 日 2 回服薬介助と食事提供

訪問看護→週 1 回。訪問診療→2 週に 1 回。

訪問調剤→2 週 1 回 薬カレンダーへセット。

<導入に至った経緯>近時記憶障害、見当識障害の進行に伴う、過剰服薬、飲み忘れにより、異常な高血圧や昏睡を招き救急搬送され、自宅での生活が危ぶまれた。服薬コンプライアンスの向上させる目的でアラーム付薬入れ導入を提案。使用が可能かサービス担当者会議で検討。血圧や認知症への影響がある、朝食後の内服から導入。アラームをヘルパーの時間と合わせ、とり出し口に薬がでたら飲むを習慣づける。

実践効果

新しい薬入れの受け入れは良く、1 週間程でヘルパーと一緒に内服をするという事が習慣化された。とり出し口に薬が無ければ飲んだという確認が視覚的にできるようになり本人が服薬に納得できた。この薬入れはかぎ付きのため、本人が操作できず、医療者が訪問毎に、飲み忘れ有無の確認をする事で安全な服薬管理が可能となった。

考察

導入の背景には、患者が元薬剤師で正確な服薬が必要という理解があった事、新しい物への抵抗感を示さなかった事、手指の障害がなく、リモコン操作等が可能で、薬入れを持ち自分でひっくり返せる事が挙げられる。残された機能を強化し出来る事を増やすことで服薬が自立し、更に尊厳を取り戻し独居生活が継続可能となった。